

メディア研究における技術と芸術

街の中や家の中でロボットが活躍する日が必ずやってくるという信念で、人と関わるロボットの研究に二〇年弱前から取り組んできた。最初は、大学のキャンパスや建物内を歩き回る目を持ったロボットを作り、それから足は車輪だけでも、機械の頭や腕を持ち、いわゆるロボットらしい見かけを持った

Robovie (ATR知能ロボティクス研究所)と呼ぶ、ロボットを開発した。そしてその人間らしさを探求するために、人間に酷似したアンドロイドの開発に取り組んできた。

Robovieの開発当初から考えてきたことは、ロボットは新しいメディアになるということである。人が持つ多くの感覚機能や脳の機能が人を認識するためにあるということは、多くの認知科学的・脳科学的研究からも間違いないことだと思う。故に、技術が進歩すれば、人間の生活を支える日常の様々なものは人間らしくなっていく。たとえば、最近であれば、炊飯器や洗濯機は音声でその状態を伝えるようになってきている。人らしい姿形を持つロボットの最も大きな役割は、そのような人と関わるというメディアとしての役割である。荷物を運ぶや食器を洗うというような特定の作業においては、専用に設計された機械の方が効率的に作業をこなすことができる。

いしごろ ひろし
石黒浩

プロフィール
1963年、滋賀県生まれ。工学博士、大阪大学基礎工学研究科特別教授、ATR石黒浩特別研究所客員所長。社会で活動できるロボットの実現を目指し、大学、研究機関、企業の枠を超え、分野の枠を超えてプロジェクトを推進する。人間そっくりの動作し外観をもったアンドロイドの開発者であり、人間とコミュニケーションする知能ロボットの研究者。近著に『人と芸術とアンドロイド』(日本評論社)

しかし、人間と関わるには、人間の脳が自然に反応できる人間らしい姿形のロボットが必要になる。

これまでのロボットの研究では、特定の仕事のためのロボット開発が中心で有り、人間と関わりながら、人間の役に立つという視点において、ロボットは研究開発されてこなかった。しかし、日常においてもロボット利用が進んできた今日では、人間らしい姿形で人間と関わるロボットの研究はさらに重要性を増してきている。

この人と関わるロボットの研究はメディア技術の研究であると同時に、メディア研究がそうであるように、技術と芸術の境界に位置する研究でもある。人間らしいロボットを実現するには、人間らしさとは何か？人間とは何か？について解っている必要があるが、その問いの答えに我々は到達していない。すなわち、人と関わるロボットの開発そのものが、その問いを探求することである。そう考えれば、メディア研究とは様々な手段で人間を表現し、人間を理解しようとする芸術と非常によく似たものであることが解る。科学や技術の先端における発明、発見では芸術的センスが必要になるといわれるが、新しいメディアの研究では、常に技術と芸術が同居している。

月刊
みんぱく
5月号目次

- | | | | |
|----|---|----|---|
| 1 | エッセイ 千字文
メディア研究における技術と芸術
石黒 浩 | 12 | みんぱく Information |
| 2 | 特集
中国地域の文化——その多様性と伝統の展開 | 14 | 文化遺産おもてうら
主役は人形なのか、人なのか？——ベトナムの水上人形劇
樗永 真佐夫 |
| 2 | 多様性、歴史、そして文化の創造
——「中国地域の文化」展示場 塚田 誠之 | 16 | 多文化をあきなう
カカオ産地は今——フェアトレードと歩んだ20年
鈴木 紀 |
| 3 | MAPシステム 野林 厚志 | 18 | 味の根っこ
フアラーフエル (後編)
菅瀬 晶子 |
| 4 | 自然環境に対応した生業 野林 厚志
多様な民族楽器 伊藤 悟
高床式住居の変貌 塚田 誠之 | 20 | 人間学のキーワード
マルチモダリティ
金田 純平 |
| 6 | おしゃれ心がいっぱい 横山 廣子
土の香りのモダンアート 韓 敏 | 21 | 異聞逸聞
国境を越えて運営されるミュージアム
出口 正之 |
| 8 | 古きを温めて新しさを創る 野林 厚志
宗教と文字をめぐる文明・文化の展開 横山 廣子
いくつもの「故郷」の融和 陳 天璽
花嫁の輿、花轎 韓 敏 | 22 | 制服の世界、世界の制服
インドネシアの法廷の表と裏
高野 さやか |
| 10 | 集めてみました世界の〇〇
揺りかご編 | 24 | 次号予告・編集後記 |